

近江より熊本城へー城郭石垣の始まりと広がりー

平成 29 年 10 月 21 日（土）

熊本城調査研究センター

（滋賀県教育委員会派遣） 北原 治

1. はじめに

2. 城郭石垣の起源について

16 世紀前半までに近江・美濃・信濃など日本各地で石垣・石積みをもつ城郭が成立。その中で観音寺城に代表される近江南部の石垣が織豊城郭を経て近世へ続く城郭石垣の起源となった。近江守護六角氏の居城である観音寺城「御屋形様石垣」は弘治 2 年(1556)の『金剛輪寺下倉米銭下用帳』の記載より金剛輪寺に属する西座の職人が関与したことが知られている。

（1）近江の山岳寺院の石垣

- ・天台系山岳寺院は荘園などの莫大な経済的基盤をもつ都市的な空間。寺院に属するさまざまな工人集団が存在。
- ・多数の僧侶が生活する坊が展開し、それらの平坦面の土留めのため、石塔・石仏などを造る石工達が石垣を構築。

（2）六角氏とその被官達の城郭石垣の特徴

- ・土造りの造作物（切岸・土塁）と石垣・石塁の間に防御上の優劣がない。
- ・防御的に意味のない石垣が散見される。→土留めや曲輪造成時に生じた石材処理のための石垣か？
- ・矢穴による石材加工（観音寺城技法）が存在。→石垣造りに石塔・石仏の石工達が関与。

3. 石垣の真価を見出した織田信長

信長の石垣：本質的な意味での城郭石垣のはじまり

織田信長は石垣の優れた防御力や堅牢性に気づき、城郭防御の要として石垣を多用。

（1）近江侵攻以前の石垣

小牧城や岐阜城に防御の要として大型の石材を使った石垣を構築

（2）近江侵攻後の石垣

近江南部の石垣構築技術を取り入れた石垣の導入

馬淵石工の安土城築城への関与（『信長公記』）・織田家の城郭石垣に観音寺城技法の矢穴石材が存在。

（3）『信長公記』にみる安土城の石垣工事

石材採取場所の広域化（安土城周辺約 6km の山塊から石材を採取）
巨石『蛇石』 石挽きの始まり

4. 若き加藤清正がみた城郭石垣

（1）清正の義父 山崎片家の山崎山城

山崎片家は近江の国人、織田信長の馬廻衆の 1 人。加藤清正は山崎片家の娘を正室、息子を養子に迎えており、深いつながりがあった。

【山崎山城の特徴】

- ・山崎山城は安土城の支城的な城郭。安土下街道との関係性。穴蔵をもつ天守的な櫓や石垣をもつ。
- ・織田信長は京・岐阜への移動の際に宿泊施設・休憩所として馬廻衆の城郭を利用し、山崎山城にも専用の御茶屋を設置。→築城は信長の意向か？

（2）羽柴秀吉の長浜城

羽柴秀吉は浅井氏攻めの戦功により湖北地域の領主となり、天正元年（1573）に長浜城を築城。この頃、加藤清正を召し抱えた。

【長浜城の特徴】

織田信長が琵琶湖の水運（経済力）を掌握するため、主要な港を押さえる城郭群（安土城・坂本城・佐和山城・長浜城・大溝城）の 1 つとして秀吉に命じて築城。内部に港を取り込む構造。

廃城後の改変や寛文地震による水没により詳細は不明。大溝城・坂本城と同じく、石垣をもつ水城であった可能性大。

（3）水城の石垣について

- ・安土城・坂本城の石垣胴木（根石の不等沈下による石垣崩壊を防ぐ目的）→低湿地に立地する近世城郭の石垣に多用された技術（最古例は永禄 11 年（1569 年）織田信長が足利義昭のために造った二条城石垣）

【低湿地に適応した城郭石垣の源流】

室町時代に琵琶湖の港町に護岸石垣が存在（絵画資料など）
下坂本『日吉山王祇園祭礼図屏風』（室町時代後期）

堅田『片田景図』（16 世紀前半の堅田の町並み・港を描いた襖絵を江戸時代に模写）『本福寺跡書』に記載された石垣『磊』。

・港湾都市 下坂本と堅田の石垣

下坂本や堅田は京都へ向かう陸路（途中越え・山中越え）と湖上交通の結節点であり、比叡山（延暦寺・日吉大社）の外港として発展。比叡山焼き討ち後、港周辺に坂本城が選地。

港の護岸石垣の構築には比叡山に所属する「穴太」などの石工が関与？

5. 石垣に進化をもたらした豊臣秀吉

【豊臣秀吉の石垣】

秀吉の石垣は単に戦いの施設でなく、圧倒的な力の差を示すことで敵味方を屈服させる戦略的な道具の 1 つ。

（1）豊臣秀吉の石垣戦略

目指したもの：短期間でより高い石垣（高さ・品質・見栄え）の構築

方法：人員・物資の大量投入、石垣の技術革新 → 石垣の進化

【驚かすための石垣】

方広寺の石塁

小田原攻めの石垣山城

割り石だらけの肥前名護屋城石垣

（2）進化する秀吉の石垣

I 期 賤ヶ岳の戦い以前 ～天正 11 年（1583 年）

姫路城・山崎城 石垣をもつが、矢穴は未確認。野面積み

他の織田家臣の石垣と同じ

II 期 天下統一まで 天正 11 年～天正 18 年（1583～1590）

大坂城第 1 期・2 期（1583 年～1588 年）・方広寺石垣（1586 年）

- 1）隅角部は横長の自然石による算木積み。石材の法量差が大きい。野面積み
- 2）石材供給範囲の拡大：石船（石材の海上輸送）の活用
質の良い石材を遠隔地（小豆島）から搬入。
- 3）連続矢穴技法の導入

これまで活用できなかった大型石材が用材として利用可能。分割線上に密に連続する矢穴を彫り込むことにより、未熟練労働者でも意図した形に石材を割ることが可能。→石材分割作業に大量の人員を投入可能になった。

III 期 文禄・慶長期 天正 18 年～慶長 3 年（1590～1598）

肥前名護屋城・八幡山城・伏見城

- 1）隅角石の画一化
・多くの石材（自然石）の中から角石に適した形状・法量の石材を選び出す（I・II 期）から石材を加工して意図する形の角石を作り出す段階へ変化
利点：石材選びの時間ロスをなくす。精度の高い隅角部の造作（石垣の反りなど）
- III a 形式 重箱積み（方形化）：築石と独立した正方形に近い角石で隅角部を構成（肥前名護屋城天守石垣）
- III b 形式 定形化した長方形石材の算木積み（八幡山城本丸改修石垣）
徳川幕府による名古屋城や徳川大坂城などの江戸初期の天下普請の結果、全国に普及。

- 2）矢穴による分割石材を多用
・自然石（採取石材）→割石（加工石材）へ築石が変化。面を持たない円礫などこれまで使用できなかった石材も利用可能となる。
・広範囲の採石場所での石材採取から狭い範囲の石切場での石材加工に変化→石材運搬ルートの固定化により作業の効率化。徳川の天下普請により全国へ普及。

（3）石垣技術で判る？秀吉の本音

豊臣政権下の諸大名の城郭石垣には、技術的な格差が存在。
その格差は最も多くの技術(技術者)を専有していた秀吉が意図的に作り出した事象？

【秀吉の本音？】

身内や信頼できる家臣にのみ築城技術を開示
裏切りそうな大名には意図的に技術を教えない

◎信頼できる家臣や服属大名の石垣：重箱積みの隅角・矢穴あり

- ・加藤清正の熊本城や脇坂安治の洲本城
- ・前田利家の金沢城や毛利輝元の広島城

▲裏切りそうな新入り大大名や元同僚の石垣：矢穴なし。

- ・蒲生氏郷：松坂城 12 万石→会津城 91 万石（栄転のようにみえる左遷）
- ・長宗我部元親：大高坂城（かつて四国攻めで敵対）

×信用していない大大名の城郭：石垣なし。

- ・島津義久：鹿児島城（かつて九州攻めで敵対）
- ・上杉景勝：春日山城（勢力を保ったまま服従したが、信用しきれていない。）
- ・徳川家康：浜松城（石垣あり）150 万石→江戸城（石垣なし）250 万石
（かつて小牧長久手の戦いで敵対・対徳川包囲網城郭を構築して警戒）

6. まとめ